

市瀬由自教授の退職に際して

佐藤，典人

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

29

(発行年 / Year)

1999-03-13

市瀬由自教授の退職に際して

この3月末日をもって地理学教室の市瀬由自教授（＝「先生」と表現）が定年で法政大学を去ることになった。先生は1928年4月に長野県下伊那郡龍江村（現飯田市）で次男ながらも4人兄弟の末っ子として生まれました。よって本年度、満70歳になられたわけです。

先生は、地元の小学校、中学校時代にすでに地理的な事象はもちろんのこと、考古学の遺跡調査などにも関心を抱かれたと仄聞しております。フィールドワークこそが地理学の地理学たるゆえんと申してよいでしょうけれど、先生の生まれ育った伊那谷には、そのような地理、なかならず自然地理のフィールドワークにもってこいの適地が数多くあります。そういう身近な場所での野外観察や調査を体験するうちに、無意識ながらも先生は地理学に魅かれ、徐々にこの学問分野に染まっていったのではないかと予想するに難くありません。奇しくもそういう折に、伊那谷の地形調査を目的に訪れた故多田文男、中野尊正の両先生に接したことが、その後の市瀬先生のとるべく方向を決定的にしたようであります。しかるにこの両先生との接触が、先生の人生に実に大きなインパクトを与えたと言えるかも知れません。誠に人生とは偶然的で不思議なものです。

1948年4月、信州の田舎から青雲の志とともに上京された先生は、早速、法政大学高等師範部地理歴史科に入学し、時間の空いている昼間には（財）資源科学研究所の助手（その後、1970年3月まで嘱託として勤務）としても働いた。そこでは地理学の先生方に加え、地理学周辺分野の多くの先生方と談話する機会を持つことができたようで、夜の大学の講義を含めれば正に『地理学漬け』の日々だったようです。実に羨ましい環境とも言えます。

その後、学制改革に伴って新制大学として発足した文学部地理学科に編入学され、続いて1953年4月には、新設された法政大学大学院人文科学研究科地理学専攻修士課程の第一期生として入学されました。さらに同博士課程入学と同時に、研究助手として法政大学に採用され、1965年4月から専任講師に就任し、法政大学の教壇に立ちました。以来、今日までの30数年間、主に地形学、および生物土壌地理学を中心に教鞭をとられてきました。この間、多くの学部学生、通信教育部学生、ならびに大学院生を教育指導し、世に輩出させてきたことには多くの説明を要すまい。

このような先生の歩みから察するに、先生の研究のスタートは（財）資源科学研究所での仕事に発しているかと思われます。事実、当時、日本に襲来した大型台風に起因する水害の調査が最初の仕事と先生は回顧しております。その一方で林野庁の治山治水に関する研究にも従事しました。さしづめこの頃、先生の関心事は河川源流部における地滑りや崩壊地の形成、それに付随する土砂礫の供給と運搬あたりにあったように見受けられます。諫早豪雨に伴う災害、狩野川台風の被害、加えて吉野川の水害等々の一連の研究は、先生の前述の関心事の一環として位置づけられるでしょうか。これらの業績をあげられる間に、先生は科学技術庁の専門委員にも任命され、研究に教育に多忙な毎日ながらも充実していた時を過ごしていたものと推察されます。

その後、先生の視点は山間地から平野にシフトしております。すなわち人間の生活の舞台として位置づけられる沖積平野を、おもに地殻運動の観点から調査し、平野の形成過程を吟味しました。それに絡んで、沿岸部の砂丘地形に関する研究や、平野の地形環境と遺跡の立地と分布にも関心を払っております。この辺になると、かつて伊那谷で過ごした時代に培われた考古学的な『眼』がいかなく発揮されているものと申してよいでしょう。

地形学に関して素人である小生が敢えて申すならば、先生のこれまでの一連の研究とその視座は、地形形成に関与する『河川の作用』をベースに、土砂礫の生産⇒運搬⇒堆積の過程を順次、追究しているように思われます。この点において極めて整然とした見方と言えるのではないのでしょうか。

きっと先生の個性的な板書や「あの一」を間投詞的にはさむ名（迷？）調子のお話をいつまでも懐かしく思うのは小生だけではありますまい。先生、長いあいだ本当にご苦労様でした。どうぞ今までもましてご健康に留意して下さいませ。

〔地理学教室・佐藤 典人〕